

日本家屋から保育を考える②

築 120 年古民家『聴福庵』

第 6 4 号 2018 年 5 月 21 日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

読み・書き・算盤

前号に引き続き、日本家屋から保育を考える②についてです。

本号でも、新宿せいが子ども園 藤森平司園長のブログや、
新宿せいが子ども園の保育実践から『聴福庵』を通して、
保育について考えていきたいと思います。

西田知己さんの「寺子屋の楽しい勉強法」には、現代における教科と
対比させて、寺子屋ではどんな勉強をしていたかを紹介しています

当時の「読み」「書き」「算盤」は今の国語や算数を学ぶことだろうは
想像がつきますが、理科や社会は何によって、どのように教えていた
のかは想像つきません。逆に総合的学習は、寺子屋というよりも、昔
の学問そのものという気がして、いろいろな学びは、総合的に行われ
ていたのだと思います。この本の「はじめに」には、このように
書かれてあります。

「時代が違えば、教育の狙いや方針も異なります。その差は優劣で割
りきれぬ話ではありませんが、現代の教育にも有益な先人の教えが読
み取れるかもしれません。」

臥竜塾ブログ 2009 年 12 月 23 日『江戸時代の遊び』



本誌、第 56 号聴福庵を振り返って①

0 歳児教育



保育者のためのはじまりシリーズ
学習研究社 (2001/2/15)
藤森平司 著



【提灯（ちょうちん）】

一張（ひとはり・いっちょう）



1-100 のもの探し！

藩校などでの学びは、武士として一人前になるために通わされていたというイメージがありますが、商人や職人、農民の子どもが義務ではなく、寺子屋に通う意味をどう見出していったか不思議です。そこには、庶民にいたるまで、子どもには教育が必要であるという意識の強い思いがあったからでしょう。しかも、それは、7, 8 歳で寺子屋で学び始める前の「0 歳児教育」の必要性までも江戸時代には認識されていたのには驚かされます。江戸時代の子育て論には、子育ては「胎教」から始まり、さらに乳幼児期の教育が強調されているのです。それが、昨日のブログの「性、相近し。習い、相遠し」が根拠になっています。誰でも平等に持っているものは、「人の世にうまれていまだ私欲に染まらぬ前の、ひたすらに素直な心」であり、このような「生まれながらの気質の性」をいかに損なわずに育むかが子育ての目標になるのです。これが、子育ての本質である中庸で言う「誠」なのです
臥竜塾ブログ 2010 年 7 月 8 日『学ぶ意味』

物の数え方

一枚、一個、一頭…といった、数字の後につく「助数詞」日本語には 500 種もの助数詞が存在しているようです。しかし、今実際に使われている物は、100 種程度だそうです。

『聴福庵』では、昔ながらの道具も多く暮らしの中で子どもたちへ、ものの数え方も伝えていくことができます。

(参考：第 58 号 聴福庵 2 年目を振り返って③)

保育園の 1-100 のもの探し！

子どもの「これくらい・あれくらい」を実際に数字で知り、数という単位を遊びを通して学ぶための環境。メジャーを使い様々な物の長さを測り「5 cm あった！」などと見つけていきます。デジカメで物の写真を撮り、現像して表の「5 cm」の部分に貼る。(臥竜塾生ブログ 2015.6.22 単位展 3M 参考：本誌第 54 号臥竜塾年間講座まとめ)

日本家屋から保育を考える① 築120年古民家『聴福庵』

第63号 2018年5月14日発行

ミマモルジュ抜粋

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「保育者」・「コンシェルジュ」＝
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カグヤ 奥山卓矢

『聴福庵』

2016年4月より、築120年の古民家を『聴福庵』（ききふく
あん）と名付け、自分たちの手で一つひとつ直してきました。

『聴福庵』は、子どもたちに「ぬくもり」を通して、
日本人の習俗を伝承する民間施設です。

本号と次号では、新宿せいが子ども園 藤森平司園長のブログや、
新宿せいが子ども園のフェイスブックから『聴福庵』を通して、
保育について考えていきたいと思います。

また、これまでの『聴福庵』の企画につきましては、

下記のレポートをご参照ください。

聴福庵のあゆみ（本誌、第2号）

『聴福庵』2年目を振り返って（本誌、第56号～58号）



本誌、第63号日本家屋から保育を
考える①

●過去のバックナンバー

第61号

幼児期の終わりまでに

育ってほしい10の姿①

第62号

保育園見学

第63号

日本家屋から保育を考える①

[http://www.caguya.co.jp/topics/ne
ws/p9889/](http://www.caguya.co.jp/topics/news/p9889/)

日本家屋から保育を考えて思うこと

今回、新宿せいが子ども園 藤森平司園長の臥竜塾ブログを参考に
日本家屋から保育について考えてきましたが、以前前述のブログを
拝読する中で、日本家屋や日本文化から保育を考える内容にとっても
感銘を受けました。

私たちは古民家『聴福庵』に携わるようになり3年目を迎え、
少しずつですが日本家屋や日本文化に触れる機会が増えています。

ただ古民家を直しているのではなく、子どもたちに伝承していきたい
日本人の暮らしがここにはあります。

そして、その中で『聴福庵』の甦生（再生）が進む中で、日本家屋を
在り方が現代の保育に実は活かされ、根付いていることを発信する事で
保育のヒントになるのではないかと思います、2回に渡り配信しました。

配信することで、まだまだ検討の余地があることを感じつつも、
『聴福庵』になぜ私自身が携わっているのかを再確認する機会にもなり
ました。

そして、ブログの中で藤森先生は、「日本における家という空間が、
どのような役目を担ってきたかを見ることで、保育室という、子どもた
ちが生活する空間をどのように考えたらよいかを知ることができまし
た。」と仰られていました。いつか自分の言葉でも伝えていけるよう、
更に学びを深めていきたいと思います。

（報告者：株式会社カグヤ 奥山卓矢）



〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2 号館 10 階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、
QRコードからお願いします。